

## **太白区中田第一地区民生委員児童委員協議会**

### **～大震災を振り返って～**

(平成 27 年 1 月)

中田第一地区は、仙台市の南東部に位置し、名取市閑上漁港にもほど近く、海寄りの田園地帯を二分するように仙台東部道路が南北に縦断しています。

「3.11 大震災のあの日」、大津波によって壊滅的な被害を受けた閑上地区とそれと比して甚大な津波被害を免れた当地区との明暗が分かれました。仙台東部道路が防波堤となって大津波の勢いを食い止め、トンネルを伝ってある程度の瓦礫の流入などはあったものの、幸いにして家屋の流失や人命等の津波被害はなく最小限の被害で済んだことは何よりの救いでした。名取川の逆流と東部道路のトンネルや用水路などを伝って押し寄せる津波は堤防に無数の亀裂を生じさせ、又田園地帯を冠水させ、大きな塩害をもたらしました。

一方で、大地震による家屋の被害は半壊、一部損壊が多く見られ、震災発生と同時に避難所へ向かった住民は、ただ右住左住する状況でした。また、閑上地区からの避難者も数多く見られ、小学校 2 校、中学校 1 校の 3 か所に加え、コミュニティセンターも避難場所となりました。なかには高齢者を背負って高層アパートの 4 階以上に避難させた住民もいました。また 17 棟もの中高層の市営住宅に加えて障がい者施設が数多くあること、そして一人暮らしや高齢者のみ世帯・障がい者、要生活援護者が多いことから多様な支援が必要であり、容易に避難行動のできない住民の多い地区ともいえます。震災直後から電気、ガス、水道などのライフラインの停止はいうまでもありません。特にエレベーターの停止は、買い物もできず、食料が尽きてしまった高齢者・障がい者にとって致命的なものでした。またガソリン不足の影響も大きく、皆が交通手段に苦慮しました。

そうした混乱状態の中、それぞれ関係機関との連絡調整がつかないまま、指定避難所の小学校を拠点に学校職員、学校周辺在住の地区ボランティア、民児協が中心となって炊き出しを始めざるを得ませんでした。炊き出しは、約 1 週間続きました。

その後は全国からの支援物資が小学校に届き始め、民児協の各委員もそれぞれ担当地区の在宅被災者向け配布等に奔走しました。対象者は担当地区の住民だけでなく、隣接閑上地区など、他の被災地から知人を頼って百数十名を超える人びとも含まれました。配布を始めて一週間を経た後、指定避難所の四郎丸小学校が卒業準備等のため、支援物資等の集結拠点を他に求めざるを得ない状況となり、日々到着する支援物資の配布に支障を来さないようにするため、急遽、民児協の個人宅(副会長宅)に拠点を移し、学校職員・民児協委員共同で小学校からの移送・仕分け・被災者への配布作業等を行ないました。

大震災から 2 年、3 年と経過し、仮設住宅にいた被災者は、地元に戻って生活再建

に全力を尽くす人、そのまま仮設住宅に残る人、それぞれの道に向かって歩み始めました。そして3年8か月余り経た今、塩害にあった田畑も大規模圃場に変えるべく土地改良工事が進み、彼方此方から家屋の新築・修繕の槌音が聞こえて来るなど復興の歩みが進んでいます。その一方で生活再建の途上で苦しんでいる被災者がいることも忘れてはなりません。

大震災の経験を踏まえ、いつやってくるかわからない災害からいかに身を守るか、その対策の必要性を感じ、地区全体で取り組むことになりました。連合町内会を中心に地区社協・民児協で検討、それをもとに町内会ごとに防災計画が生まれ、地区全体の研修会や防災訓練が毎年行なわれています。また、19団体で組織されているネットワーク作り(ほっとネット in 東中田)も進み、支援の輪も広がっています。民児協も積極的に参加し、地区の絆作りに努めています。

今、思い返せば、支援活動に携わった民生委員は自身の被災をも省みず、全員一丸となって1か月以上にわたって支援活動を続けました。あの日の大震災は、私たちに多くのことを教え、私たちは多くのことに気づき、多くのことを学びました。自然の恐ろしさ、命の大切さ、平凡な日常生活のありがたさ、そして「人と人が支えあうこと」がいかに大切であるかを・・・



防災訓練の様子